

やすらぎだより

10
月
号

陽気で緑にあふれた生活 それがやすらぎ園です

施設長コラムバックナンバーホームページ掲載しています。

コラム第148号

「落語を一席」

施設長 植田 誠



「かかぁ 羽織出せ」

「まゝ何ですのん 羽織 羽織て。あの羽織かて アンタの甲斐性で買ったんやおまへんやろ いいやなこのあいだ 母屋のご隠居さんから 形見分けにしてもらったもんやおまへんか・・・」(落語『初天神』の枕部分)

三十数年前、笑福亭仁鶴のカセットテープを聞きながら一生懸命覚えた唯一の持ちネタは、失せることなく脳裏に刻まれている。他の施設と同じく当時のやすらぎ園も‘演芸’を披露する月毎の催しには事欠かず、大義は‘入所者’の憩いの時間であったとしても、若い職員に対するある種‘修練の場’としてもてはやされていた。

その名を「ホールの集い」と言う。要介護度という言葉もなく自立度も存在しない、ホンワカした空気に包まれた‘お年寄り’達と三角巾を頭に巻いた‘寮母’さん、そして何でも屋の私達は過ぎゆく時間をさほど気にすることなく、常日頃知り得ぬ仲間の一芸を共に楽しんでいた。

見慣れたものや聞き慣れたことで役目を終えようとするムードは無かったと記憶する。普段見せない姿、まさに「かくし芸」であればあるほどその中身の出来以上の喝采は得られ、何でも屋の面目躍如と満足する自分がそこにいた。そしてそれが‘処遇’と呼ばれた。

心地良い秋の風情のこの頃、プロアマを問わず多種多様な催しが盛んに開催される昨今、昔の施設では当たり前のように‘慰問’と呼んでいたのが懐かしい。時代が変われば呼び名も変わり、関わる意味も変わるの当たり前だろう。

専門家の芸に人は感銘し、場馴れした玄人には安心感が伝わる。しかし、素人を知れば知るほど玄人の良さは更に知り得る。身近な職員のかくし芸は、専門家の一芸以上に脳裏に焼き付くはずだ。

何故、落語を選んだかは定かではない。汗をかいた若き素人の余興ではある。さりとて遠い昔の一席は今も色あせてはいない。

(現在ではあまり使用しない言葉を時代背景によって使用しています)



社会福祉法人やすらぎ会 実施事業

- | | |
|------------------|--------------------|
| ○特別養護老人ホーム やすらぎ園 | ○ケアハウス やすらぎ |
| ○在宅サービス事業所 | ○介護予防関連事業 |
| 居宅介護支援事業所 | ○グループホーム むつみあい |
| 訪問介護事業 | ○低所得高齢者等住まい・生活支援事業 |
| 訪問入浴介護事業 | |
| ○短期入所生活介護事業 | |
| ○在宅介護支援センター | |
| ○天理市東部地域包括支援センター | |